

北海道の元気! NPO訪問

27 NPO法人 森林再生ネットワーク北海道

文・加藤知美

森と人をつなぎ「もつたいたない森」を再生 市民参加でつくる持続可能な資源循環

◇ 「森の道」づくり研修

旭川の中心部から車で二〇分ほどの山際の森の中に溶け込むように存在する一軒の住まいを訪ねた。「NPO法人森林再生ネットワーク北海道」の代表・陣内雄さんの自宅で、昨年までは団体の事務所を兼ねていた。現在は、閉校になった旭川第一中学校の校舎に間借りした事務所を拠点に活動している。通称名の「もりねつと北海道」のほうが通りがよいかもしいない。

もりねつと北海道が目指しているのは、森林と地域を結んで持続可能な生態系が広がることだ。森林はきちんと手入れをすることで豊かな恵みをもたらしてくれる貴重な資源となることは知られている。だが、木材価格の低迷、私有林所有者の高齢化、林業の担い手不足など様々な要因で放置されている森林が増える一方である。保全すべきところと活用すべきところを区分した上で、森と人をつないでいかす努力が必要だ。そこで、地域の手入れが行き届かない森林を市民参加で再生する事業が発想された。

今年六月、旭川市東鷹栖ポンスプリで、「森の道」をつくる技術を習得する研修会が開催された。「森の道」とは、森の手入れや収穫をしやすくするために幅三層ほどの細い道を毛細血管のように森の中に設けるもの。一般には一〇メートル以上もある大型機械で効率的に伐採作業をおこなうが、「森の道」は、軽トラックや林内作業車が走りまわることを想定している。大型機械と異なり木の根や幹をあまり傷めず、山林所有者が気軽に巡回して山菜やキノコ、ホダ木の採取ができるなど、「森の手入れがしたくなる道」なのである。施工は小型のユンボを用い、表土を活用して路肩をつくっていく。掘り出した木の根や石も補強材となる。四国の四万十式作業道の技術を北海道向けにアレ

ンジして技術を確立しようとしている。

今回の研修会では、三日間のオペレーター養成講習に八名が参加し、実際に道を作りながらルートへの取り方や土の動かし方などを学び、その後の普及研修会に

は、自治体や森林組合、造園や建築の企業などから約三〇人が参加し、森づくりへの活用を検討した。もりねつと北海道では、森林所有者が自ら森に通ったり、地域の住民や都会の人たちも森に親しみ森の恵みを暮らしに取り込むことで、資源循環の仕組みをつくらうとしているのだ。

◇ 森林保全と林業の両立に向けて一歩

陣内代表は、建築家としての道を歩むうちに林業の問題に行き当たり、下川町森林組合で働き、持続可能な森林管理の仕組みを考える研究会を経て、二〇〇五年に「北海道森林ガバナンス研究会」を立ちあげた。縦割りになっている既存の組織や活動をつなぐ新たなセクターの必要性を感じ、NPO法人を設立することとなった。



道づくり研修会の様子
ルートへの取り方などを現場で学ぶ



森に親しむためのさまざまな工夫をこらして企画された「やまもりまつり」

的機関によって整えられている。日本でも、地域の特性に応じた専門的人材を配置し、森林保全と林業を両立させる仕組みの確立が必要である。もりねつと北海道では、「森の相談」事業

にも取り組んでいる。山林所有者が森を活用できるようにアドバイスしたり、相続問題の解決を提案したりする。

◇ 森林管理のモデルケースづくりに邁進

もりねつと北海道が活動するフィールドは、旭川市内に二カ所。旭山動物園の奥にあるペーパン地区と市北西部の東鷹栖地区だ。

ペーパン地区では、二〇〇八年から北海道教育大学岩見沢校のアウトドアライフ専攻科の学生と一緒に「地元学」として集落の稲作農家などに聞き取り調査をおこなったことがきっかけで、現在はこのエリアに団体の事務所もあり、交流が続いている。

山林を所有する農家が、田んぼの仕事のない冬に少しずつ自分の山の手入れをする。そんな住民の存在が、資源循環のモデルとなり、農村再生につながれば、との思いがある。今年七月には、森を歩いたりチェンソー体験などで都市住民が森に親しむ「やまもりまつり」を開催したり、旭川周辺や東京の家具木工関連の若手デザイナーや作家が交流する「木工キャンプ」をこの地区で実施した。

一方、東鷹栖地区では、カタクリの群生地として知られる突哨山の管理を運営協議会の方針のもとで二〇〇九年から指定管理者として受託している。里山として利用されてきた身近な自然を公共空間としてどう保全し活用していくのかを、さまざまな立場の関係者が現場に立ち、話し合いを重ねて検討するプロセスでもある。

陣内さんは「もつたいない森が多い」と言う。山林所有者が自分の山がどうなっているのかわからないまま放置していたり、親が売ってしまったかと思っていたのにまだ所有権があったり、なんとかしたいと思っても手入れの方法を親の代から受け継いでいなかったりする。かつては木材を切り出して儲けることのできる財産だった山も、今では木材価格の低迷や手入れのコストのために昔のやり方では採算がとれない。近年、国産材を地域で活用する傾向もでてきたが、持続可能な森のマネジメント体制がないためにうまく資源が循環しているとは言い難い。

ドイツやオーストリアなどで百年以上のビジョンで循環がつけられているのと対照的だ。ドイツでは、森林管理を担うフォレストラーと呼ばれる専門家がマネジメントをおこなっている。また、そうした人材育成のための高度な教育システムも公

今年度からは、近文第二小学校の総合学習もおこなっている。北欧の森林教育プログラムL E A Fを取り入れて、一年生から六年生まで一貫して子どもたちの「生きる力」を養おうと発達段階にあわせた授業を模索している。



代表の陣内雄さん
音楽アーティストでもある

もりねつと北海道の活動は、代表の陣内さんを中心に、五名の有給スタッフが奔走している。活動を支える一八名の運営委員の力も大きい。森に親しむイベントや森の恵みを活かしたクラフトの開発・販売などをすすめる。財務基盤は助成金や指定管理者の委託金などを中心としているが、年間一〇〇〇万円に届いていない。森林に関するコーディネート業務やマネジメントを推進していくために、モデルをつかってアピールしていくのが現段階の目標だ。いずれはドイツのように森林関連産業での雇用拡大につながるような森林管理が北海道で実現することを働きかけつつ、まずはたくさんモデルケースをつくっていきたくと陣内さんは語る。

◆ NPO法人森林再生ネットワーク北海道

所在地 旭川市神居町神華15517

TEL 016616910066

WEB <http://morinet-h.org/>